

釣り

釣れづれの記

人間には誰にでも道楽の一つや二つはあるものである。言い訳ではないがこれを持っていないと本業の仕事の中味も濃くならない。

釣りも分野が広く、海、溪流、湖、川、池、から細いチヨロ川までエリアがあり、それに応じて竿も仕掛けも餌さも違うのだから道具は小さな釣具店ほどになる。これが私の財産なのだが、もし、釣りにのめり込まなかったら私にとって宝物にも等しいガラクタさえ残せなかったであろう。ガラクタにはすべてに何物にも変え難い思い出が刻まれているからだ。

この釣りを道楽として、魚と遊び暮らしていると、思わぬことにいくわすことがある。これは魚獲のことではなく、人間自身が作り出す無間地獄の罠である。特に鯉釣りは無聊との対決でもある。此処と確信して投入した浮木は半日過ぎてもピクリともしない。それでも釣り人の脳裏は律儀に働き続ける。

脳裏に浮かぶのは会心の釣りではない。決まって失敗釣りが多い。竿を折って逃げた鯉、糸を切って逃げた鯉と現れては消え、消えてはまた現れる。独釣、無風、初夏の陽光とこれだけ条件が揃えば、つまらない講演より効き目がある。眠さの襲来である。背後から昇

った陽が背中を射抜いて脳髓までほんのり暖かい。この温もりは以前どこかで味わったことがある。母のねんねこの中であったか、母その人の存在の安心だったような気もする。遠い日の思い出の温感
は眼前のこの単調な風景にどうしても重ならない。半睡夢遊は脈絡のない連想をまたもや理不尽に掘り起こす。それにしても眠い。眠りは徐々にではなく全身麻酔のように突然ある瞬間に来る。危ない！糸を手首に巻く。魚信を逃さないためだ。この期に及んでも釣り人はもしもに縋って執着を手放さない。常備の雨合羽を広げて仰向けになって空を見る。何とも心地よい気分だ。「宰相の位もものは」淡い地の精の朝霧が紺碧色に座を明け渡すのも間近い高空だ。目を瞑ると釣り糸のように細く透明になった心身が、形而の遙か上の宙に登っていくようだ。母がよく云っていた「眠るは極楽」とはこのことか。いや、母のそれは労苦から解き放たれ無意識の世界に浸ることのできる唯一のときであり、その自由こそが極楽だったのかも知れない。

手首から指先に実感する釣り糸は、あの日、疎開先までの三里の道のりを私の手を引いて歩き続けた母の掌てのひらの感触と入れ替わる。しかも早送りの映像は、その部分だけを色づけして強烈な印象を残

して他のものをすばやく先送りする。想い出は声までもが表情を持っている。待てよ……母の享年は五十四歳……私が会津地区に赴任したのは五十四歳！母の面影はあの時点で停まったままなのだが、自分が同年齢の男になっているという現実^{たやす}は容易くは受け入れにくい。

「お菰^{こも}さんを粗末にしたり、馬鹿にしたりしてはならない。人が物貰いをするというのは余程の訳があつてのことだから、三度の食事のできる家ではお恵みをさせてもらうものだ」終戦直後の日本は一面の焼け野原で、多くの人は住む家も無く身に纏うものにもこと欠き、一億人がまさに飢餓の渦中にあつた。中でも戦災で身寄りを失った栄養失調寸前の幼老婦女は、今日を生きることだけの意志にしろうじて支えられ、人間としての尊厳さえも放棄したような虚ろな目で運命を恨むことさえ忘れ果て、焼け残った家の門口に無言で立つしかなかったのだ。母はそのような人々を同情や哀れみという感情や理性の次元を超えて、不幸な時代と不運なときを共に生きる意味を共有できた人だったのかも知れない。数年後、その時のお菰さんの何人かが礼に尋ねて来る度に、私は子どもながら母を誇らしく思つたものだった。

飯豊山は朝の陽光を受け新緑の土手の一線上に白い衣を纏って鎮座ましましている。勿体ないような美しさだ。思わず両掌りょうてを合わせてしまう荘嚴美だ。信仰の山は美しさだけではない。それを見る人の心の奥底まで揺り動かす。断片的で濃淡のある心のアルバムの数々は懐かしさを超えて哀しいまでにいとおしい。

釣りは釣果もさることながら思索を深める。思索はここまで生きてきた経験と体験からしか生まれえない。将来の思索は空想や推測に過ぎないからである。生きるということは現実の積み重ねであり、それ故に今という時は尊いのである。その尊い時間を眠った浮木と共に過ごすのは、大いなる矛盾とのたもう人がいるかも知れない。しかし、私にとっては無駄どころか「無用の用」であり、採るに足りない考察も顔を赤らめる恥ずかしさの反省も、すべてはこの時間の空隙から生まれる。

三十億年前、単細胞同士だった生命が、運命を賭けて「知恵比べをするのを笑う勿れ！」人間の知恵は「望」の上に「欲」がこびり付いただけなのだ。

もっともこの分では、ここには私を笑う魚も居ないらしい。陽も高くなった。今日もいい釣りが出来た。